軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第49号
2024.11.29

初めての投稿 ―寺田家の人々―

柴　澄（ ソプラノ ）

軽井沢から熊谷へ嫁に行って50年になります。息子の通っていた熊谷高校、父も通っていた高校の100周年記念でPTAコーラスを発足させました。100人集めようで始まり、20周年コンサートをやり、30周年コンサートをやろうという最中、コロナで学校へ行けなくなり、遂にはPTAコーラス解散までになってしまいました。新しいコーラスを作ったのですが80人いた会員もほとんど辞めてしまい5、6人しか残らなかったので、私は和佳子さんがやっているシンフォニックコーラスに入れて頂くことになりました。

私の父も母も高校の教師だった為、皆難しい名前が付いています。長男「準」ひとし、長女「泉」いづみ（和佳子の母親）、二女「篤」みすず、二男「巍」たかし、三女「澄」すみ。私の名前はすみですが、親・兄弟みな、すみこ、すみこと呼んでいて、いまだに呼ばれています。姉の「すみこ」と呼ぶ声が聞こえるようです。長男は長野、二女は岡谷、二男は母の実家の跡取りの為諏訪へと、皆、軽井沢を離れています。

私は「一年の半分は軽井沢へ行っているね」と言われる程、軽井沢の母の所へ来ていました。旅行が好きだったので、姉が議員を辞めたら二人で散々旅行に行こうねと約束していましたが、私が実家を建て替えて新築祝の時、姉が「私ガンです」と発表して2年で亡くなってしまいました。2人で行った旅行はヨーロッパ旅行1回きりでした。人生は思い通りには行かないものですね。

旅行と言えばハプニングばかりです。私の息子が2才、和佳子が7才の時、10月の連休を使い2泊3日で熱海伊豆旅行を家族中でしようという事になりました。夫婦、姪、甥、総勢17名。姉は行かれず、母と和佳子、私、夫、息子の5人で1台。長野から岡谷から諏訪から、私たちは熊谷から出発です。台風20号がやってきていました。今みたいに携帯もなく、家電しかありません。行くのか行かないのか、母の発言によりゴーとなり、皆出発しました。関東直撃の台風なので雨風は強くなり熱海・小田原道路は通行止めとラジオで聞き、私達は厚木でこれ以上進めないと宿を取り1泊する事になりました。長男達は芦ノ湖あたりで車が水に浸かり修理してもらいながら熱海に夜遅く着いたのですが停電で食事が出来ず、カップラーメンだったそうです。すみこ達は美味しい物を食べているのだろうと、羨ましかったそうですが、私達も風が強

くて揺れるような宿で怖かったのです。次の日全員が揃い大宴会の中、大笑いでした。

台風一過の中、良く晴れた伊豆を回り、無事、皆が帰途につきました。兄弟でたまに会うと、台風の中、旅行に行ったといまだに語り草になっています。

夏休み、中尊寺、松島、十和田湖、東北旅行です。姉と和佳子、私、夫、息子の５名でマークⅡで出発です。順調に巡り、帰りの東北自動車道では 120 ㎞を出すとピンポーンピンポーンと鳴り出します。姉と夫が交代で運転していましたが、姉が運転していた時、急にガソリンがないと気付きました。さあ大変です。次のサービスエリアまでガソリンが持つだろうかと皆心配しながら、あと何キロ、あと何キロと、やっとサービスエリアに着いた時は、ほっとしました。その後無事に軽井沢にたどり着きました。これも後の語り草になっています。

最後のフロンティアー：アラスカについて　　小松 照幸（ バス ）

1968 年、アラスカのアンカレッジにあるメソジスト系の大学に、第一期交換留学生として留学しました。初めてアラスカの名前を聞いた時のイメージは、実に単純な考えが浮かび「氷のお家（igloo）イグルー」だらけかと思いました！ また、そんな北極圏に大学などが有るのだろうかとも思いました。

当時、アラスカに関する観光情報は殆ど無い状況でもあり、母校の大学では、恐らく日本の大学でも珍しい「アラスカ研究会」を立ち上げ、指導する先生方と学生が、実に逞しくアラスカ研究を開始していました。その努力の一例として、南米から北米を通ってアラスカまで到達する自動車クラブによる冒険、探検が行われました。また、英語のアラスカ情報を日本語に翻訳し冊子を作成したのも、アラスカ紹介の資料としては先陣を切った努力であったと思います。

アラスカを理解するには、その歴史、地理的特性、土着の人々とアメリカ人との関係、広大な土地と気候風土など、その多様性を多面的に理解しなければなりません。何よりも書物による知識だけでなく、やはりその地に赴き現地の人々との関係を通して深い生活体験をしなければ、外国文化を心から理解することは不可能でしょう。

私のアラスカ体験は、二度の渡米留学を行いアメリカの学部と大学院留学で学んだことですが、その体験はその後の人生の生き方に感謝しきれない程のインパクトを与えてくれました。２０代で通算５年近い長期間、異国の地で暮らしたこと、日本語の世界から外国語の世界でもがき苦しんだこと、夢のようなアメリカの大学で、学部と大学院で学べたこと、アメリカ人の友人と深い付き合いが今日まで続いていることなど、

実に多様で深い生活体験を経験したことは、いわゆるユング心理学で言うところのNuminous experience（深い意識に残る心的体験）となり、心の宝にもなっています。

そもそもアラスカとはどう言う所でしょうか？ 良く知られていることは、1741年にベーリングがアラスカに到達してロシア領となり、19世紀の中頃1867年にはアレクサンドル2世の時、ロシアはアメリカに売却しました（アラスカ買収）。また、19世紀末には金鉱が発見され、所謂ゴールド・ラッシュが起こります。そして、1959年には、アメリカ最後の州となりました。翻って、ロシアの国土は桁外れに広大であり、ヨーロッパとアジアにまで跨る国家はロシア以外存在しません。７０歳で大学を定年退職する直前に、３ヶ月を掛けて世界一周旅行を敢行しましたが、その第一歩は、極東ロシアのウラジオストックからでした。そこからイルクーツクまでは、三日三晩、ロシア縦貫列車の旅でしたが、車窓から眺める風景は、見渡す限り白樺の森が延々と続き、その広大さには呆れるほどでした。現在でもロシアは世界一の広大な国土を持っている訳ですが、それに加えて、かつてアラスカまでもがロシアの国土であったとは、これまた驚きです。

まず初めにアラスカの歴史についてですが、これはインターネットで検索すれば、簡単に情報を入手できます。ネット検索による歴史的背景とは別に、私の個人的な感想があります。それは、人類の歴史にも関係することですが、人間が地球上の生物の中で進化し、二足歩行となり、その知恵と身体的能力によって、地球上を移動し続けて来たことです。人類の起源は、アフリカ、タンザニアのオルドバイ渓谷から始まるとされています。それは、175万年前の人類の祖先ではないかと言われるアウストラロピテクスの骨が発掘され、一躍世界の注目を浴びた場所です。やがてアフリカからヨーロッパへ移動し、アジアを経由し、そして南北アメリカ大陸にまで、地球をぐるりと移動し続けて来た訳です。

従って、極東ロシアとアラスカは、その間に“セント・ローレンス島”を挟んで往来が出来ました。そうすると、アラスカには様々な人種の人々が住み着いてきた訳で、具体的には土着の人々としての内陸インディアン、エスキモー、アリューシャン人が存在し、その後にロシア人、そしてアメリカによるアラスカ購入により多様なアメリカ人の人々がアラスカにも住むようになりました。アラスカの現代史は、その潜在的経済価値の発見によって大きく変化してきたと言えるでしょう。アラスカが未開の地の時代には、ヨーロッパ人たちが毛皮や海産物を求めて冒険旅行を行いましたが、アメリカ人には金鉱発掘ブームにより、広くアラスカの存在が知られるようになりました。

第二次大戦中には、昭和17年(1942年)5月、日本軍は北太平洋から侵攻する米軍を阻止する戦略「ミッドウェー作戦」を立て、それを死守するための陽動作戦として、米領・アリューシャン列島のアッツ島を攻撃しました。が、ミッドウェー海戦で日本

軍が大打撃を受け、太平洋での優位を失うと、アッツ島の 2600 人余り守備隊は米軍の軍艦や爆撃機によって補給を阻まれ孤立し、全滅した歴史もあります。

戦後の日本は、パルプ工場をシトカに建設し、豊かな海産物、特に鮭やタラバガニの輸入から始まり、現代では、アラスカの豊かな天然資源である石油、天然ガス、木材、豊饒な海産物などを中心とした重要な交易が続いています。戦後の日本にとって、アメリカとの経済交流は重要な国策ですが、それを支えるものは、アメリカ人と日本人の相互の文化交流であり、これまでとこれから先の日本人にとっても、諸外国との文化交流は、平和を維持するために最も重要なことであると思っています。

大いなるアラスカは豊かで魅力的な大地であり、私を鍛えてくれた第二の故郷です。次回折が有れば新田次郎が書いた「アラスカ物語」や、アラスカ留学の相談に直接関わった関係から「星野道夫とアラスカ」についても、少し触れてみたいと思います。

遠い国物語(17) 音楽との初めての出会い　　真崎 隆治（ バ ス ）

先回、ヨーロッパの夕べの野に遠くから響いてくる鐘の音と、日本の夏の夕暮れに彼方の大木から聞こえてくる蝉の鳴き声が、それぞれに違った憂愁な思いを魂にまで届けてくる美しい感動のことと、それにもかかわらず、気づけばどちらも数を集めて耳元近くで鳴るなり鳴くなりするときには耐えがたいかしがましさになることをお伝えした。西洋と東洋の音楽の本質的違いを「鐘」と「蝉」で表現したかったのだが、これは所詮無理で、訳の分からない暴論だったと反省している。しかしそれなりに言いたかったのは、日本の音楽が単音ないし少ない音を基本においているのに対して、西洋のものは複数の音から成立しているということだった。単旋律と和音からなる複旋律と言ってもいいかもしれない。

はじめてのフランス生活はフランス政府給費留学生として、ストラスブール大学のプロテスタント神学部博士課程の学生寮の一室だった。フランスの大学でも学生たちは昼食は主として学生食堂でとる。日本の学食よりかなり安価で、しかも量的にも味覚的にも充実していた。学食は市内各所にあり、食堂の入口には週はじめになると１週間のメニュー表が掲示される。学生たちはあちこちのメニューを見て歩き、今日はどこ、明日はあそこというように心覚えしておく。学生たちは大学で購入した券を持って行けばどこでも好きなところで食べることができた。仮にその日のメニューが評判で行列ができたとしても、しばらく並べば食べ損なうことはまずない。

ところが僕の入った寮の食堂だけは、学生なら誰でも入れるのは同じだが、席数に限りがあり、しかも昼に一回かぎり提供されるだけなので、まず寮生が優先的に入り、席数に余裕のあるぶんだけ他の学生も座れるようになっていた。しかもここのメニューは学食と言いながらも、市内でも味のいいことで評判だったから、入口の前は食事時間になると大勢の学生が取り囲むことになり、早い者順ではなく、押し合い勝ち順というのだろうか、その日の当番の寮生が全員着席したのを見届けて合図をすると、押し合いへし合いの大騒ぎになる。寮生たちは悠然と座ってその騒ぎを眺めているという大変結構な権利を楽しむことになる。ここでメニューはという話になると、またもや音楽の話はどこかへとんでいってしまうので、想像におまかせして、質素な学生用の田舎料理とはいえ、軽井沢ではとても食べられないおいしさだと言うにとどめておこう。

昼は学食で、夕方は街のレストランで、時には友人の家に招かれて、ストラスブールでの食事は恵まれたものであった。日本人のなかにはフランス料理の毎日に音をあげて、和食を食べたがる人もいたようだが、僕はそのようなことはなく、朝から晩までフランス料理で満足だった。

ストラスブールに来てから半月ほどしたとき、寮での食事が終わり部屋に戻ろうとして、髭もじゃの男から「僕の部屋にコーヒー飲みに来ないか」と声をかけられた。これが後に親友となるジェラールであった。寮生の部屋は狭い。２脚しかない椅子はもとより、机にも、ベッドにも、窓枠といい床の上といい、10 人ほどの男女の学生がぎっしりつまっていた。簡単な自己紹介と、拍手のなかでコーヒーがまわってくると、歌が始まった。独唱ではなく合唱だ。ギターを弾く者がいる。ヴィオラを弾く者がいる。スプーンを打ち合わせてリズムをとる者がいる。茶碗を叩く者がいる。皆が何かしらで音楽に加わっている。歌はハーモニーがついているが、さまざまな音が歌とともに見事な調和をなしている。これがフランスで出会った最初の音楽であった。

音楽の合間にはてんでに好き勝手にしゃべっている。いつの間にか歌が始まる。たちまち和音がつき、鳴り物が入る。これが音楽なのだ。皆の心がぎゅう詰めのなかでこすれあって、それが自然発生的にすばらしい、楽しい、皆の音楽を創りだしていくのだ。この世界にはカラオケなどない。日本から来た（当時の）青年は衝撃を受けた。ヨーロッパの音楽の底辺にはこれがあるのだ。長い歴史のなかで熟し、専門化し、作曲家が出て、演奏家がいて、聴衆の感性が育ち、あのヨーロッパの壮大な音楽が生まれてきたのだ。

その後、プロの音楽家の演奏を聴くようになり、それは素晴らしい体験の蓄積となっていくのだが、ラジオやテレビでなく、生の音楽との出会いはこうしたごく日常的な状況のなかでのことであった。ところでプロの演奏を聴く前に もう１曲アマ

チュアの演奏を聴くことになった。それはこの寮の女子学生を中心とした 10 数名からなる女性合唱団によるフォーレの『ラシーヌの詩による讃歌』であった。これを寮の中庭でさして練習もしないままにさらりと歌ってしまうのは さすがフランスの音楽パワーだなと感心して聴いていたが、それから 30 数年してシンフォでこれを歌うことになろうとは思いもよらぬことだった。この懐かしい曲をもう一度シンフォで歌いたい。皆さんいかがですか。

【編集後記】

☆年内最後の TUTTI には、柴澄さんが初登場　寺田家の楽しい思い出をご披露くださいました。日に日に昼間の時間が短くなり、心ふさがれるような報道に気分が落ち込みがちですが、小松さんのアラスカや真﨑さんのストラスブールが、ここではないどこかに心を飛ばしてくださいました。続きを楽しみにしております。

☆次号はなんと５０号になります。これからもどうぞよろしくお願いいたします。（岡田）